

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】黒川茉莉

【所属】(助成決定時) 上智大学大学院 文学研究科国文学専攻 (博士後期課程1年)

【研究題目】キリシタン版文法書の典拠となった、イベリア半島文典類の原典的研究

(副題) ラテン文法と日本語文法との史上初の邂逅をめぐる

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、ザビエル来日 1549 年以降のキリシタン時代に、イエズス会が日本で布教の為に刊行した日本語文典のうち、特に統語論に対し、当時のイベリア半島文法書類を典拠原典として彼此対照する事で、統語記述の全体構成の解明に至る事を目指す。これらのキリシタン文法は、いずれもラテン文法の枠組みを範例とし、そこに日本語を当てはめる試みであり、ラテン文法と日本語文法の史上初の邂逅である。ラテン文法を範例とし文法を記述する事は、16 世紀当時、イベリア半島に於けるロマンス語 (ラテン語起源の諸語) 文法では既に盛んであり、ラテン文法適用に何の疑いも無かった。それを、ラテン語と系統関係の無い言語にまで適用したのが、キリシタン時代の文法であり、日本語文法もその一つである。言語に系統関係が無いのに、記述がそれを前提とする事が、特に統語論記述の難解さを招いている。キリシタン時代に刊行された日本語に関する記述を持つ文法書の著者が全てイベリア半島出身者である事に着目し、当時のイベリア半島文法書の原典に遡り、初の日本語統語論の編纂に至る道程を、そのイベリア半島原典の理解に基づいて解明する事を旨とするものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、キリシタン版の日本語統語論に就いて、その解明には典拠としてのイベリア半島文法論の援用が有効であるとの見通しの下に、次の手順で研究を進める。1. 『天草版ラテン文典』(1594) のうち、日本語記述を持つ巻一のラテン語原文に、初の全邦訳と必要な典拠注釈を含む、精密な解釈を与える。2. ロドリゲス『日本大文典』(1604-1608) のポルトガル語原典には、既に丸山徹氏が 30 年以上前に作成された電子化本文が存在するが、異本であるクロフォード本も参看した校訂本文として再編制し、豊富な統合情報タグを施した電子化テキストとする。例えば、当時のポルトガル語では、現代ポルトガル語正書法が書き分けている過去形と未来形などが区別無く、無秩序に混用されているが、原文の精読に基づき、解釈によってタグに preterito(過去)・futuro(未来)を明記して、識別可能とし、文典の記述の「地の文」の時制の分布などに関する対照研究の基礎データとする。これには、原文の正確な解釈が必須であり、中世ポルトガル語の知識が不可欠であるので、本文第一稿完成後にポルトガル在住の専門家に校閲を仰ぎ、正確を期す。キリシタン版の日本語文法は、ロドリゲス『日本大文典』の邦訳(1955) のみに基づいて論ぜられる事が多く、独特の文法術語も、邦訳に置き換えて考察されて来たため、特に複雑な統語論部分の解明には限界があった。本研究は、その原典(ラテン語・ポルトガル語)を全て電子化した上で、イベリア半島文法の諸原典の電子化本文を援用して、原語の表現を忠実に辿り、当時のイベリア半島独特の文法術語や、統語論自体の構成方法、形態論・韻律論との棲み分け等を克明に対照するので、これまで明らかにされて来なかった根拠と、これまでにない精度で、ラテン文法と日本語文法の初の邂逅から、日本語文法書編纂に至る過程の解明を行なった。研究助成申請書には、海外渡航による原本調査、及び専門家からの助言を受ける計画を記したが、COVID-19 により渡航が不可能となった為、当初計画は少なからず変更を余儀なくされた。

【結論・考察】（４００字程度）

キリシタン版日本語統語論へのイベリア半島文法書の影響に就いて、助成を受けた期間でも既に「格」及び、「文語文法・口語文法の形式差」に関する査読付きを含む論文を２本公表する事が出来た。「格」に関しては、ロドリゲスが日本語統語論を論ずる為に「格」を示す品詞 *artigo* を新設した事実に基づき、日本語統語論の記述に「格」が必要である理由に就いて、単なるラテン語屈折格への日本語助詞の当てはめではなく、日本語がラテン語同様、統語的な「格」を用いて記述され得ると実証したものである事を論じた。また、形式差に就いては、文法書に各種文献から引用される用例に着目し、キリシタン日本語文典は、用例を全訳するか否かと、その用例の翻訳に出典を明示するか否かの二つの条件で大別される事、その用例の翻訳状況により、本格的な統語論を持つ専門的文法書とそれを持たない基礎的な文法教本に分類出来る事を論じた。これらによって、本研究の方法論の有効性を示し得たものとする。今後は、更にこの研究視点を含む、新たな方法論を開拓して、ラテン文法と日本文法の初の邂逅の研究を深めて行きたい。